

Agora

アゴラ

No.31

広げようアジア太平洋の知的交流ネットワーク



杭樺英 / 樺英画室《五洲大藥房ポスター》
中国 / 1920 - 30年代 福岡アジア美術館所蔵

- [特集] 自主研究6Bプロジェクト研究主査インタビュー
- [事業報告] 市民カレッジ2000、第4回ワークショップ、
若手研究者研究活動助成対象者決定、アジア情報懇話会、
国際日本文化研究センター福岡講演会
- [レポート] 台湾現地調査同行記、若手研究者研究活動報告
- [刊行物紹介] 自主研究4Aプロジェクト成果本、
研究誌「アジア太平洋研究」第7号

第6期自主研究 6Bプロジェクト 研究主査インタビュー

6Bプロジェクト 「アジアにおける技術革新と地域発展」



永野 周志 氏
(ながの ちかし)

永野国際法律特許事務所弁護士・九州大学大学院法学研究院客員教授

プロフィール

1948年生まれ。九州大学法学部卒業。弁護士。専門は知的財産権法、会社法。99年4月から九州大学大学院法学研究科客員教授も務める。

2000年4月から、アジア太平洋センターの第6期自主研究がスタートしました。今期の自主研究6Bプロジェクトでは、アジアにおける技術革新と技術移転の問題に焦点を当てプロジェクトを実施しています。今回は、特に情報関連技術分野などで先進国と肩を並べている台湾の事例を中心にアジアにおける技術革新と技術移転の望ましいモデルを模索するものです。

6Bプロジェクト研究主査の永野周志弁護士にプロジェクトのテーマである「アジアにおける技術革新と地域発展」の趣旨や意義についてお話を伺いました。

今回のテーマは「アジアにおける技術革新と地域発展」ということですが、この研究の主な目的及び趣旨はなんですか。

アジア地域は輸出志向型工業化により経済発展をしてきましたが、それを支えたのは直接投資を通じた先進工業国からの技術導入です。アジア地域が期待したのは直接投資が域内産業を誘発し経済が発展すること、技術的側面に置き換えると「技術移転から技術革新へ」というシナリオであったでしょう。しかし、直接投資型技術導入は域内における生産性の向上には寄与しましたが、技術革新への寄与度は大きくはありませんでした。「技術移転から技術革新へ」のシナリオが実現されるためには、技術移転のほかに技術革新をもたらすメカニズムやシステムがさらに必要です。韓国や台湾の経済発展

研究期間

2000年4月～2002年3月（2年間）

研究主査

永野 周志（永野国際法律特許事務所弁護士・九州大学大学院法学研究院客員教授）

共同研究者

居城 克治 福岡大学商学部教授

坂口 光一 九州大学ベンチャービジネスラボラトリー助教授

金 甲 秀 科学技術政策研究院研究委員（韓国）

簡 錦 川 台湾総合研究院副研究員（台湾）

王 明 郎 台湾総合研究院副研究員（台湾）

（敬省略・順不同）



研究会風景

がASEAN諸国よりも著しいのは輸出志向型工業化の着手が早かったという時間的要因よりもそのようなメカニズムやシステムにあります。この研究は直接投資型技術移転が果たした役割とその限界の検証を通じて技術革新をもたらすメカニズムやシステムを分析することを目的とします。

今回、台湾を主な調査対象国・地域に挙げられていますが、特に台湾に着目された理由は何ですか。

経済発展が著しい韓国と台湾とでは、韓国の産業の担い手が財閥型大企業であるのに対し台湾のそれが中小企業であることに大きな違いがあります。我が国に限らず台湾でも経営規模のため中小企業の技術開発能力は制約されています。しかし、このようなハンディ



台北市の街なみ

キャップを抱えている中小企業が、台湾では、産業の担い手となり半導体技術や情報関連技術分野で世界のトップランナーとなっています。このことは、分析に値するでしょう。

第2の理由は、台湾の技術政策です。第1の理由と関連しますが、中小企業が抱えている技術開発能力のハンディキャップを克服するため、財団法人方式という特徴あるシステムで技術革新と開発された技術の産業化を行っています。これは、開発成果を事業として丸ごと工業技術研究院や諮訊工業策進会等の財団法人からスピアウト(転出)させる方式です。このような技術革新システムも見逃すことができません。



工業技術研究院



ヒアリング調査

最後に、アジアにおける技術革新と地域発展のために、今後の福岡・九州としての関わり方について何かございましたらお願いします。

工業技術研究院や諮訊工業策進会等の財団法人は高い技術開発力をもっています。九州では、いまでもアジア諸国を安い労働力を利用した生産拠点や技術移転の相手方と位置付ける考えが根強いですが、そのような認識を改める必要があります。今後は、台湾や韓国等の高い技術開発能力をもった企業や組織等との共同開発を積極的に進めるべきです。



視察風景

どうもありがとうございました。

日本及びアジア地域全体の技術革新の今後の方向性についてはどのようにお考えですか。

既存市場はアメリカや日本等の強力な競争者が占めており新規参入の余地が小さいこと、装置産業では事業化に巨額な資金が必要とされること、技術集積があること等の条件を考えると、NIEs諸国ではIT関連分野での技術革新がおこるでしょう。特に、台湾においては、シリコンバレーに直結していること、アメリカ留学から帰国した大量の技術者が技術革新を支えていることを考えると、IT関連分野での技術革新は著しい筈です。現在ではIT関連産業の規模は日本が世界第2位で台湾が4位ですが、台湾の成長率は日本の10倍近くです。数年後にはこの分野で確実に日本を追い越すと思います。韓国や台湾では産業発展の蓄積を踏まえて半導体や液晶等のハードウェア分野でも技術革新が急速に進むでしょうが、生産拠点として直接投資を受け入れ輸出志向型工業化の途上にあるASEAN諸国の技術革新は緩やかなものでしょう。

日本の可能性はバイオ技術や環境技術等のアジア諸国が取り組み得ない技術分野です。

市民カレッジ2000開催

メインテーマ：「シルクロードのルネッサンス
～新しい交流のルートを探して～」

この市民カレッジは、アジア太平洋地域について体系的に理解する連続講座として1996年度から実施しているものです。今年度は、メインテーマを「シルクロードのルネッサンス～新しい交流のルートを探して～」とし、全6回シリーズで行いました。

今年度は、各分野の専門家をお招きして、日本とシルクロードの歴史的、文化的、経済的な関係、及び現在シルクロードが新たな交流地域として注目されている現状を国内外の視点から分析するとともに、今後日本が多様化する交流にどう対応していくべきかについての視座を提供していただきました。

* 各回とも会場と時間は、天神ビル11階会議室 18:30～20:30 各回の要旨は次のとおりです。



第1回

シルクロードの魅力～何故シルクロードにひかれるのか～

2000年10月16日(月) 講師：樋口 隆康氏(京都大学名誉教授、檀原考古学研究所所長)



中国から前漢の武帝が来て、西からアレキサンドロス大王が来てシルクロードの東西文化交流がはじまった。しかもその道の中で、平和的にお互いの持っているものの中で相手方ないものをお互い求め合ったという、国際交流が人類史の中で最も理想的に成功裏に行われたのがシルクロードの世界や時代だった。これは日本がこれからの国際交流を考える上でじっくり研究してみるべき点と思う。

シルクロードの要衝、アフガニスタン・ティリア・テベ遺跡の金の冠の樹木飾りは藤の木古墳の冠と同じものであった。金糸を持ち帰り調べ

たが、大阪阿部山古墳出土の金糸とよく似ていた。純金を細く伸ばしそれを扁平にたたいて燃ったもので、日本ではこれと同じ物が何ヶ所か出ている。

シリア・パルミラの地下墳墓はお墓の中にたくさんの棺柩があり、70体くらいできた人骨を見てもらったが色々な民族がミックスしている。棺、彫刻など、ぶどう唐草模様や飛天女、ガンダーラ仏教美術に似た絵紋などがあった。

飛鳥村の酒船石や亀石など奇石は渡来イラン人が作ったものではないかと考えている。伊藤義教氏らの説によると、日本書紀にイラン人が古代日本へ渡来したのではという記録がある。漢字表記の人名を中世ペルシア語詞に当てはめることができると言うのである。

第2回

シルクロード外交とユーラシア地政学

2000年10月26日(木) 講師：金子 将史氏(財団法人 松下政経塾フェロー)



中央アジアは日本にとって重要な諸国であるロシア、中国、中東諸国に近く、結果的に日本の外交政策にはね返ってくる部分が多い。シルクロード外交は、1997年7月24日に橋本前首相が太平洋から見たユーラシア外交を提唱したのがはじまりで、政治対話、繁栄への協力、平和への協力を三つの原則とする。

1998年10月アクションプランを作成、1999年1月から実施に移された。政治対話として渡辺外務大臣の中央アジア訪問やアゼルバイジャンへの大使館設置、繁栄への協力として、

地域間協力推進、エネルギー資源開発協力、市場経済化推進支援、環境問題調査協力、経済交流や国連を通じた平和協力を行った。

中央アジアには、不安定要因として、ソ連時代からのモノカルチャー経済、タジキスタンの内戦、ナゴルノカラバフ地域帰属問題、独裁政権による権威主義的体制、イスラム系の住民の高い出生率や失業問題、原理主義、水利問題、酸性雨、民族問題などがある。

これらを踏まえ、日本は、ロシアや中国のような将来重要な関連を持つ国々が中央アジアに大きな関心を持って行動しているということ考慮に入れて政策を組む必要がある。21世紀には北東アジアのエネルギー問題も自国輸入ばかりでなく、中国も中央アジアから輸入できるので北東アジア全体が安定するといった発想も重要である。

第3回

中国西部大開発とシルクロードの経済発展戦略について

2000年10月31日(火) 講師：黄 一超氏(新疆師範大学法経学院助教授)



中国経済における東西格差の解消に西部のインフラ整備が重要課題となってきている。

西部地域には、豊富なエネルギー資源、観光資源があり、その中でも最も特色があるのが、新疆のシルクロードであり、南ルート、中部(中北)ルート、新北ルートがある。この地域の文化遺産をいかに開発し、経済振興に活かすかが重要であり、

開発により他産業の牽引も可能になる。

西部開発のポイントとして、新疆の国道整備、南疆鉄道、中央アジア

への空の交通整備、天然ガス開発や上海までのパイプライン計画という大型プロジェクト、西部地域の石油産出地域への水供給や楼蘭地域を蘇らせるための灌漑などがある。また、この地域の綿花生産量は中国でも首位であり、布加工地としての紡績工業の強化や金属鉱業(金、銅)の開発も重要である。西部地域経済開発の中で、黒は石油、白は綿という戦略を打ち出してきたが、最近赤が加わった。赤は、トマトケチャップ、クコの実、紅バナ油、ナツメの紅色である。

西部地域開発の中でも、一番期待されている資源が、テンチ、ハナス湖、ボスデン湖、高山、氷河など雄大な風景や美しいオアシス、シルクロードの古代文化遺跡などの観光資源であり、シルクロードの潜在価値を高め、環境を保護していく開発が望まれている。

第4回 イスラーム文化の受容と多様性

2000年11月9日(木) 講師：片倉 もとこ 氏 (中央大学総合政策学部教授・国立民族学博物館名誉教授)



シルクロードは絹の道だけでなく、人間が欲望をコントロールしながら行った巡礼の道でもあった。交易もあったが、モノや人だけでなく、精神文化やイスラームもそこを伝わっていった。

イスラームに宣教師はいない。押しつけがましくなく静かな宗教といえる。われわれが怖いとか暴力的とかいうイメージを持ってしまふのには3つの理由がある。

マスコミは異常を報道するのが常で、日常は報道しないこと。イスラームは宗教のみではなく生活様式そのものであったり広いものなのに、部

分的なものだけしか見ないこと。明治以降の脱亜入欧政策で、イスラームもアジアの宗教ということで切り捨てたことによる。

イスラームの根幹は、タウヒード、一元化の思想であり、全てのものは一つにまとまるという。イスラームは都市から出た宗教で、どういふふうに都市の中で生きるかを教える。またイスラーム文明はネットワーク型文明であり、21世紀、ネットワークで結ばれる世界の中では新しい文明といえる。都市という出入りが自由な社会でイスラームは、迎え入れる文化と送り出す文化を持つ。また、イスラームは移動の文明でもある。ジワールの制度がありイスラームはどんな旅人でも助ける。イスラームは「ゆとろぎ」とも呼ぶべき時間を大切にす。まずゆとりとかくつろぎの時間を持つということである。

第5回 遊牧民族とシルクロード

2000年11月14日(火) 講師：森川 哲雄 氏 (九州大学大学院比較社会文化研究院教授)



遊牧民族は、定住をしない。そして四季、家畜と共に移動し、主として家畜が産み出すものを糧として生活する人々である。シルクロードは、中央ユーラシアを核とした一つの商業ルートの総称で、東西交渉の道だけでなく、クロスする形でさまざまな南北の道もあった。遊牧騎馬民族国家は、遊牧的牧畜経済を営む遊牧民を直接生産者として構成された政治的集団で、

国際商業、交易を国家の手によって直接的、間接的に支配するということも重要な定義となっている。

紀元前8世紀から1世紀にかけ全盛だったスキタイが史上初の騎馬民族国家と言われ、東胡、匈奴、鮮卑、烏桓(ウガン)、柔然、突厥(チュルク)、回鶻、契丹(キタン、キタイ)、遼、モンゴル帝国、モンゴルと続き、17世紀後半から18世紀半ばのジュンガル王国が最後の騎馬民族国家と位置づけられている。

目立った活動をした人々として、ソグド商人とか、ムスリム、ブハラ人、漢人、ギリシア人がいた。遊牧民として我々が抱くイメージとは別に、広大な領域を支配する遊牧国家が国家を維持するためには、交易活動を積極的に行う必要があった。遊牧民族国家の国家としての交易活動によってモノ、人、文化の流れが中央ユーラシアにおいて古くから行われてきたわけである。

第6回 新シルクロード論～沙漠を旅して21世紀型交流を想う～

2000年11月24日(金) 講師：長澤 和俊 氏 (早稲田大学名誉教授・就実女子大学教授)



シルクロードとは、「太古以来、アジアとヨーロッパ、北アフリカを結んだ東西交通路の総称」であり、北がステップ路で遊牧民が古代から利用した。南のオアシス路は中世から近世に東西交通で栄えた。紅海、ペルシャ湾からインド洋を経て東南アジア、カナンへの海上交通路は、近世以降、香料やキリスト教布教のためにヨーロッパの船が進出した。

シルクロードをめぐる遊牧民の活躍は世界史の時代区分に重大な寄与をした。アーリアン拡散による古代文化発生。中世はボルガフンデンの

ヨーロッパ進出によるゲルマン民族大移動ではじまり、近世はセルジューク・トルコの西進によるキリスト教信者との対立から十字軍がおこりルネッサンスの胎動が発生。人間の考え方は異質文化が入るとそれに対する反対文化運動が起こって、新しい文化が創造される。

今年は大海道探検を行った。経済格差是正のため、西北大開発が言われているが、敦煌からトルファンへハミ(哈密)を経由せず直行する大海道は西部大開発の一つの動脈になると思われる。

あわせて金大中の鉄のシルクロード構想があるが、そうした交通路をひらくことで日本が中央アジアに進出したり、日本が中央アジアの諸民族と話し合うことも可能になる。民族の枠を超えるシルクロードを通じて、世界平和構想や経済交流を図っていかなければならない。



第4回 ワークショップ

テーマ：「韓国 変わりゆく儒教社会」

講師：鄭炳連氏
韓国・全南大学校師範大学倫理教育科教授

コメンテーター：松原孝俊氏
九州大学大学院言語文化研究院・大学院比較社会文化学府教授

日時：2000年12月12日(木) 13:30～15:30

会場：天神ビル11階10号会議室



講演要旨

儒教の理想的な人間像は、聖人君子であり、これは孟子、論語の中にもある。君子の特徴は、徳がなければならないことである。儒教(朱子学)が韓国にはいつてきたのは、800年前、高麗末のことだった。儒教は様々な影響を韓国社会にもたらし、儒教研究は多岐に行われている。また、韓国、日本、中国の三国の中で韓国の儒教(朱子学)が最も正統的な継承者である。

1997年韓国で経済危機がおこった後、儒教に対する反発は大きく、否定的な意見が多かった。「孔子が死ねば国は生きる」という本がベストセラーになり、儒教生死論が盛んに行われた。これはIMF時期に、経済危機の原因を求める声やリストラに対する不満のはけ口として、時節を得たためであろう。しかし、儒教が韓国社会のあらゆる不合理のすべてに責任を取るべきものではない。

儒教とフェミニズムは、水と油の関係であるが、近年合致点を見いだそうという動きがある。まだ合意には至らないが、家長制度、同姓同本の婚姻の問題など、今後対話を重ねていくであろう。

儒教は、死後の世界に言及していないので、宗教的な面が非常に弱く、一般大衆の心の中に接近できていない。そのため、学問的な研究はされているが、生き残るためには脆弱である。この問題は解決できず、今も放置されている。従って、21世紀において儒教が進む方向は、時代の変化に流されるのではなく、いかに変化を主導していくかが大事である。儒教は、人間性の回復、共同体の建設に必要なものである。

平成12年度第2次 若手研究者研究活動助成対象者を決定

この助成は、アジア太平洋地域の異なる文化理解の促進または地方発展に関する研究を対象とし、九州北部4県の若手研究者(40歳未満)の研究活動を資金的に支援するものです。対象となる活動は「海外現地調査」、「国際研究会参加者招へい」、「研究成果出版」の3つで、平成12年度の第2次募集では、12件の申請があり、次の6人の方を助成対象者に決定しました。



- ソクヘイン(九州大学大学院生物資源環境科学府博士課程)
「カンボジアにおける持続的森林管理を実現するための
コミュニティ・フォレストに関する研究」
 - 蘭葵(久留米大学大学院比較文化研究科博士課程)
「中国の都市部におけるコミュニティ・サービス(社区服務)
と高齢者生活サポートネットワークに関する研究」
 - 榊祐子(九州大学ベンチャービジネスラボラトリー講師
中核的研究機関研究員)
「日韓バイリンガルにおける言語習得のプロセス
- 認知心理学的観点から -」
 - 松隈潤(西南学院大学法学部助教授)
「ASEAN法の可能性 - ベトナムの視点から -」
 - 呉宣児(九州大学大学院人間環境学研究院特別研究員)
「語りから見る原風景の構造と心理的機能」
 - 村上理映(九州大学大学院比較社会文化研究科博士課程)
「日・台・韓における廃棄物リサイクルの経済的手法」
- (敬称略、申請順)

* 松隈氏は国際研究会参加者招へい活動、呉氏は研究成果出版活動、他は海外現地調査活動。

[レポート]



(財)アジア太平洋センター研究交流第1係 永瀬 眞二



新竹科学工業園区内の風景



現地企業において

11月28日から12月3日までの6日間、自主研究6Bプロジェクト「アジアにおける技術革新と地域発展」の現地調査に同行し、台湾(台北市及びその近郊)を訪問した。

今回は、台湾の技術革新に対する公的部門及び民間部門のとりくみについて、技術立国である我が国と様々な点で比較することができるということもあり、個人的にも非常に興味を持ちながら現地調査に同行した。この調査をとおして、訪問先の方から、たくさんの貴重な情報を得ることができ、また、台湾産業の原動力をかいま見ることができた。今回は、その中で感じたことの一部を紹介したい。

街の状況

台湾は、私が初めて訪れた所であり、自分の頭の中ではイメージ(バイク、沢山の人)だけが先行していた。

しかしながら、私の目に映ったのは、思っていたよりも静かな街並みや意外に多かった街の緑であった。プロジェクト参加研究者の先生の話によると、やはり以前よりも静かになっているとのことである。

そして車窓から私の目に飛び込んできたのは、日本でもなじみのある牛丼屋やコンビニの店の看板、台湾風にアレンジ(現地の好みに合うように前面のデザインを少し変更してあるなど)された日本の車だった。このような光景は、私の知る限りの他のアジアの国よりも多い感じをうけた。

海外に行くと、英語やハングルなど様々な言語が街の風景のアクセントになって、「ここは外国」というイメージを受けて



街の風景

しまうが、台湾については、もちろん日本と違うところはあるものの、あまり外国という印象を強く受けない感じがした。

台湾国内産業をとりまく技術

今回は、台湾の自動車及び情報関連産業についてのヒアリング調査を行った。

自動車産業においては、海外(日本・欧米)の企業との技術提携により数社が生産を行っており、日本と同様に各社がこれからの展開に向けて様々な戦略に取り組んでいるようであった。

また、訪問した現地企業においては、テクノロジーという部分だけでなく生産管理システムにおいても技術の移転が実施されており、それらをうまく具合に取り入れ、台湾に合う形で独自のシステムを作りだしていた。この点でも台湾人の柔軟さは目を見張るものであった。

また、情報関連分野においては、新竹科学工業園区内(台湾におけるアメリカのシリコンバレーのような地区)で実施されている起業化プログラム(例えば資金面などで、特別な優遇措置を設けて、起業化への導入を図るなど)の説明を聞くことができた。このプログラムは人材・資金・制度などをうまく活用しており、日本以外の国々からの視察団もくるということで、個人的にも非常に興味のあるところであった。そして、その説明を裏付けるかのように、その広大な工業園区の中には、若い優秀な人材が起業にむけて取り組んでいる姿を見ることも出来た。

この調査を通じて、技術、いわゆるテクノロジーを導入するばかりでなく、それを取り巻く全ての環境(制度や生産システムなど)をうまく取り入れ、台湾にとって有益な形で発展させてゆくという、台湾における産業、そして人々の柔軟さや力強さを身近に感じる事が出来た。



台湾総督府

最後に

今回の調査では、研究主査である永野周志先生をはじめ、自主研究参加研究者の先生、特に、現地での手配などをしていただいた王明郎先生や簡錦川先生、また現地でご協力をいただいた方々には大変にお世話になった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

自主研究成果本紹介 研究叢書9【4Aプロジェクト】 中国東北の経済発展 - 九州との交流促進をめざして -

中国東北地方は、重工業中心の国有企業を多数抱えていることから企業改革に遅れをとっており、また、厳しい国際情勢の下で対外開放も進まなかったため、企業間地域間の二重の格差にあえぎ、労働者の大量「下崗（レイオフ）」を初めとする多くの課題を残しています。

本書は、このような点に着目し、福岡・山口と黒龍江・吉林・遼寧の各省に居住し、地方経済の活性化を願う日中両国の経済学者・社会学者の2年間にわたる共同

研究の成果で、国有企業改革の問題を中心に、東北地区の経済停滞、いわゆる「東北現象」や「東北病」の原因と実態を解明するとともに、東北地区の各地域経済の再興のための処方箋と九州の地方レベルでの経済協力のあり方に示唆を与えるものであります。



[事業報告]

アジア情報懇話会開催

この懇話会は、業務としてアジアにかかわっている企業・団体・行政機関が、情報の交流を通して多角的な視点からアジアに関する理解と認識を深め、業務展開上の参考としていただくことを目的とした意見交換会です。



第19回例会（2000年8月2日）

第19回の例会は、「変化する台湾のすがた」について、今年3月に詩集「TAIWAN」で第50回H氏賞を受賞された秀巧社印刷株式会社外国語チームチーフディレクターの龍 秀美氏に「文学から見える台湾」というテーマで話題提供いただきました。また、話題提供後は株式会社ジーコム代表取締役の村上 隆英氏のコーディネートで活発な意見交換が行われました。

懇話会での意見交換の主な内容

台湾では国語として標準北京語を使用するが家庭では福建、広東なまりの台湾語を使ったり、悪口を言うときは日本語を使う。また、英語なども使用されるなど「言語」の統一がされておらず、台湾語については「文字」の共通表記がない。

一般的に台湾は親日的であると言われていたが、それは必ずしも正しいとはいえず台湾と日本の関係は曖昧である。お互いに歴史的背景をよく考え、日本は台湾を、台湾は日本をもっとよく知るべきである。



第20回例会（2000年12月5日）

第20回の例会は、「中国と日本におけるビジネス上の相違点 - 中国人起業家の視点から - 」というテーマで、下記のとおり開催しました。

話題提供：株式会社華瀛産業代表取締役 董 發明氏
「架け橋の役と他山の石の役を果たしたい」

留学生起業家の体験談」
コメンテーター：西南学院大学商学部教授 立石 揚志氏

懇話会での意見交換の主な内容

現在の入管法では外国人が貿易その他の事業の経営を開始しようとする場合、2名以上日本人の常勤職員の雇用が必要だが、お金も実績もない会社設立時に2名を雇用するのは非常に困難である。また、銀行から融資を受けるのも難しい。

日本人は中国に進出する際に中国人との人脈が事前になければ成功しないと考えがちであるが、仮に人脈があったとしても、その中国人が相当強い力を持っていなければ役に立たない場合が多い。むしろ人脈に頼らず現地での直接交渉で成功することが意外に多く、その相手との関係が結果的に、後に本当の意味での重要な人脈となる。

研究誌

「APCアジア太平洋研究」第7号 (日本語版・英語版)を刊行

この度、当センターの研究誌「APCアジア太平洋研究」の第7号日本語版・英語版を刊行しました。この研究誌では、当センターの基本テーマである「異なる文化理解」と「地方発展」に沿った、アジア太平洋地域に関わる実践的な研究や取り組みを取り上げ、アジア太平洋地域における学術研究交流の推進と同地域が共に抱えている課題の解決のための一助となればと考えております。

第7号では「アジアに見る女性の社会参加」というテーマで特集を組み、マレーシア、シンガポール、韓国、インドの国々において、女性の社会参加がどのように進んできたのか、女性を取り巻く現状及び課題について論じています。また、特集のほかにも国内外の研究者や研究機関から多数のご寄稿をいただいております。入手ご希望の方は、アジア太平洋センターまでお問い合わせください。



資料・情報室からのお知らせ

昨年12月に韓国へ行き、統計書、年鑑、白書や学術書を中心に約180冊の図書を収集しました。その中から一部を紹介します。

韓国語で書かれた図書では、「2000年全国統計年鑑」ほか経済人口、流通に関する統計書。年鑑・総覧では「2000年全国企業体総覧」ほか大学年鑑、出版年鑑など。白書では「2000年国家情報化白書」ほか環境白書、国防白書など。学術書では「全羅道の人々」「21世紀韓半島の経営戦略」「北韓学概論」など。

ほかにも、韓国のメディア文化について考察している「Media Culture in Korea」ほか、「Kim Dae-jung Government and Sunshine Policy」「Women of Korea」「Population and Development in Korea Law and Society」など英語で書かれた図書も揃えております。

皆様のご利用をお待ちしております。



マレーシア特集

第3回

このコラム「マレーシア特集」は、4回にわたってシリーズで掲載し、マレーシアの様々な社会、文化、教育事情などについて、九州大学大学院人間環境学研究院講師の竹熊尚夫さんに書いていただいているものです。



屋の登下校

マレーシアの学校事情

多民族国家マレーシアでは、公立小学校がマレー語、華語(北京官話)とタミール語の3つの言語系統の学校に分かれています。中学校以降は国語であるマレー語学校の教育体系に統一されていますが、私立の英語学校、華語学校があり、バラエティに富んでいます。また、小学校では現在も午前と午後の二部制授業が採用されています。赤道直下で昼間が常に12時間なので、午前の部の児童は夜明け少し前に登校し、お昼頃になると、下校する児童と登校してきた児童で学校周辺は大にぎわいとなります。ただ、教室を別の学年の児童と共有したり、時間割があっても科目の変更が頻繁にあったりするためか、どの子どもたちも殆ど全教科の教科書、ノート、ワークブックなどをリュックに背負って登下校します。中にはまるでフライトアテンダントのようにキャリーバッグで登

校してくる下級生もいます。スクールバスを持つ学校も多いのですが、都会では朝、昼、夕とわが子の送り迎えをする親もかなり多く見られます。



キャリーバッグをひいて登校する子供

さて先日、行政上の新首都が予定されているプトラジャヤという場所にあるプトラジャヤ第1中等学校に訪問してきました。マレーシアは現在マルチメディア大国を目指しており、IT教育も日本より数段早くから導入を始めています。プトラジャヤのすぐ近くにはサイバージャヤという日本を含め海外の企業も多数参加するIT研究開発都市を建設中です。こうした環境にあるプトラジャヤ中等学校は、スマートスクールというコンピュータ教育の最先端の学校であり、国家プロジェクトのモデル校として国の期待を一身に受けています。学校の施設などはまだ完成してはいませんが、職員室もOA化に対応し、個々のブースに分かれ、

コンピュータによって生徒だけでなく職員の出席状況や会議スケジュールなども一目瞭然になっています。試験問題・評点などはアメリカから導入されたシステムをマレーシア版に修正中で、教員が皆利用できるように講習会も開かれていました。しかも、学校内の雰囲気は「無機質で冷たい」というイメージとは異なり、職員は明るく、人間的な感じがしました。イギリスの大学の教育学の博士学位を持ち、一方で子育て中という女性の校長先生が「コンピュータはあくまで学習を支援する道具として活用するものであって、一人一人の個性や適性に合わせた人間教育が本校の第一の目的です。」と熱く語ってくれたのがとても印象的でした。プトラジャヤ第1中等学校のホームページは <http://www.i-putra.com.my/> です。スマートスクールについては <http://www.ppk.kpm.my/smartschool/index.html> をご参照ください。



プトラジャヤ中の授業風景

プロフィール

竹熊 尚夫(たけくまひさお)
1963年生まれ、九州大学大学院教育学研究科終了、教育学博士、専門は比較教育学。昨年2月まで約10ヶ月間調査・研究のためマレーシアに滞在後帰国し現職。



国際日本文化研究センター 福岡講演会

タイトル：「日本文化を考える」

日時：2000年11月29日(水) 13:30～16:30
場所：福岡市庁舎講堂



国際日本文化研究センター(京都市西京区)では、研究成果の普及活動の一環として同センター及び京都市内においてセミナー等を実施するほか、東京において市民を対象として講演会を毎年6月に実施してきました。

今回、福岡市において、優れた同センターの研究成果を市民に積極的に提供する機会を得ることを目的に、初の試みとして、「日本文化を考える」というタイトルで、福岡講演会を国際日本文化研究センター・福岡

アジア文化賞委員会・アジア太平洋センターの共同開催で実施致しました。

今回の講演会では、国際日本文化研究センターの2名の研究者に「大陸アジアに開かれた日本」、「海から見た世界の文明」というテーマでそれぞれご講演いただきました。当日、会場には約500名の市民や研究者が来場し、熱心に耳を傾けていました。

テーマ：「大陸アジアに開かれた日本」

劉 建輝 氏(国際日本文化研究センター助教授)



明治以降、日本では天皇を中心とした秩序関係が次第に樹立され、国民国家が形成されるようになったが、一方、中国のほうは西洋列強の侵略を受けて半植民地的な状態に置かれており、ナショナリズムにはまだなれない不安定な状況が続いていた。その現実が互いに

強いインパクトを与えていたと考えられる。

そこで、息苦しい均質性や均一性を嫌って日本を脱出した人々の多くが、混沌の中国、特に上海のような近代国家のナショナリズムを超えた都市に、自らのロマンを実現するチャンスを見いだそうとした。また中国からは、史上初めて日本を自らの近代国家づくりのモデルと見直し、留学生などが大量に日本にやって来るようになった。

こうした人的往来を中心に民間ベースの交流が盛んに行われ、中国大陸やアジア大陸に「開かれた」ことが日本を相対化する装置となった。夏目漱石や谷崎潤一郎のような文学者やインテリだけでなく、旅行者や工場主、果ては馬賊や花柳界までが大陸を経験できるようになったため、日本人がアジアや中国を經由して「西洋発見」と同時に、アジアや中国というものも発見し、書物ではなく、実在の社会や人々を認識するようになったのである。その経験が日本人のアジア認識の基礎を形成しただけでなく、近代日本の精神構造や精神風土にも影を落とした。

このように日本の近代文化、そして東アジアの近代文化も、中国や日本、そして韓国なども含めて密接な相互関係の中で生まれ、互いに借用しながら成立させていたのではないかと考えられる。関連事実を掘り下げ、仮説を実証していく課題が残されている。

テーマ：「海から見た世界の文明」

川勝 平太 氏(国際日本文化研究センター教授)



長い歴史の中で、日本は東西両洋の文明を取り入れ、全体性かつ連帯性を持つ日本文化を築き上げてきた。だから、日本のフロンティアは日本の中にあり、地球全体を考える要素がここに満ちていると言えよう。

海洋を志向し海に開かれた「海洋日本」と土地に集中し大陸を志向する「陸地日本」が日本の歴史の中で順繰りに展開してきた構図を見て取れる。「魏志倭人伝」に登場する日本人は海人であったため、漢字に付随するはずの五行思想という陸の思想が入らなかった。しかし日本が白村江の戦いで敗れた後に中国の政治システムを取り入れ、律令の制定などを通して内陸志向となった。後に元寇襲来を経て倭寇が登場するようになり、日本は再び海洋を志向し、その極めつけが豊臣秀吉による朝鮮出兵であった。やがて江戸幕府時代に入ってから日本経済に自給自足体制ができあがり、貿易中心の海洋志向から「鎖国」に転じた。そして今度は西洋列強によって日本は開国し、近代の幕が切り落とされたのである。こうして日本は2000年の歳月をかけて東洋文明から政治的、経済的そして文化的な自立を勝ち取り、今再び海に向かって開かれている。

西洋文明との関係においても同じであり、近代以降の日本は経済活動や軍事行動を通して欧米に対する「追いつき、追い越し」をめ

ざしてきた。現在日本国内の一部に見られるような反米や嫌米感情の裏にも、実はこうして追いかけてきた国に対して対等にならんとする心理が働いているように思える。

冷戦終結後、ヨーロッパはかつて自分たちが植民地にしたアフリカに、アメリカはモンロー宣言以来の運命共同体である南アメリカに関心を注ぐようになり、関与の度合いを高めている。そうすると、日本が出ていくべき地域は西太平洋地域であろう。

日本にとって今最大の輸出入先は、かつて、日本がそこで活躍した海洋アジアである。ヨーロッパとアフリカの関係は大きな陸地の関係である。アメリカ両大陸も大きな陸地同志の関係である。しかし、西太平洋地域は小さな島々が広がっている多島海の世界である。そこでは小さなものを大事にし、弱いものを大事にすることが最も試されている。

小さなものを大切にするという意味で、中央集権的な日本をやめて、小さなもの同士が自立しながら連邦制のような国になっていったほうがいい。日本には6852の島もあり、海洋連邦と言えるかもしれない。多島海世界に平和な共存世界をつくれるかどうかを試されよう。さらに、地球も大小さまざまな陸地が浮かんでいる多島海であるとすれば、地球規模での「多島海の平和共存」という最初の実験場が日本であろう。

これからの時代は、日本文化をよそに押しつけるのではなく、よその文化をこちらに引きつけ、日本の吸引力を高めながら、互いに文化を交流していくことになる。

[レポート]



西南学院大学大学院文学研究科博士課程 金縄 初美



中国雲南、四川省の境に「瀘沽湖(ロココ)」という湖がある。湖を取囲むように村落が点在し、そこには納西(ナシ)族の支系である摩梭(モソ)人を中心にプミ族、漢族などが共に生活している。

2000年7月20日から8月21日にかけて瀘沽湖周辺の5村落に滞在し、アジア太平洋センター若手研究者研究活動「中国における民族問題の多様化に関する問題

ー摩梭(モソ)人の母系社会構造とその変容を例にしてーの現地調査を行った。調査中にふれたモソ人の生活や異民族との関係を一部紹介したい。

中国少数民族事情

中国は漢族と55の少数民族からなる多民族国家であり、少数民族は総人口の8%、約9千万の人口を有している。チベットの様に分離独立をめざす民族もいるが、漢族との共存を計る民族もあり、中国の民族問題には様々な側面がある。中国政府は少数民族に対し分離独立は認めないが、少数民族が集中する地域では議員の選出、財政、教育などの分野で限定的な自治権を認めるという「民族区域自治」政策をとっている。しかし漢族の辺境地区への移住が加速し、多くの自治区で漢族住民が多くなり、少数民族独自の文化が漢族文化に大きな影響を受け変化している。一方、瀘沽湖地区では異民族文化と調和させつつモソ人独自の生活スタイルを温存しており、漢族がモソの生活習慣を受け入れるケースもよく見られる。例えば漢族は一般的に父系社会であるが、この地では母系家庭で暮らす漢族が多い。ここでは漢族が少数民族なのである。

瀘沽湖と母系家庭

瀘沽湖は海拔2700mに位置する。水は透明で、水面は深いブルーに輝いており、モソ人が「母なる海」と呼び大切にしていることに心から共感できる。彼らはチベット仏教を信仰しているが、女神信仰もあり、人々に女神として崇められている獅子山をはじめ、いくつもの山が湖の周囲に聳え立っている。そのため、どこに行くにも車は山肌に絡みつくようにつくられた



瀘沽湖と獅子山 塩源县にて

細くてくねくねした道を走らなければならない。道はまだ舗装していない部分が多く、訪問時期が雨季だったため、ジープでさえ何度もタイヤがぬかるみ、その度下車して車を押さなければならない、繰り返すうちに現地の運転手との連帯感さえ生まれた。

モソ人の大半は母系家庭で生活し、主に農業と豚、羊、馬などの牧畜業に従事している。母系家庭は代々女性が引き継ぎ、家庭内の有能な女性が家長となり、財産や生活のやりくりを取り仕切る。モソ人は「走婚」と呼ばれる妻問婚をし、男性が夜、恋愛感情をもった女性の部屋を訪れ共にすごし、昼は各自の家で生活をし、子供は母親の家で育てられる。交際相手選びは本人の意志が尊重される。家庭内には血縁関係のない嫁や婿がいないので、もめ事が少ない。雑居する漢族や、プミ族の習慣も同様である。



モソ族夫婦が開く雑貨店



現在でもこの生活スタイルは基本的に変わっていないが、一部の村では観光開発による生活環境の著しい変化に合わせ、その形は少しずつ多様化し、異民族間の婚姻も増加している。

ある家族との出会い

調査中、30戸の家庭を訪問した。どの家庭も笑顔で迎えてくれ、親しくなると、自家製の酒と豚肉の燻製と山盛りのご飯をご馳走してくれた。親しくなったある家庭では、父親はモソ人、母親はプミ族、6人の子供たちのうち、上の3人の娘はそれぞれ違う民族の男性と走婚し、彼女たちの子供はみな母親と暮らしている。長男は独身で、「母親のもとで暮らしたい」と言い、下2人は都会に出たがっている。この家族と接していると、各自の考えに合わせた生活スタイルを選んでいるが、基本的には母親を中心にして団結していることがよく分かり、多民族が融合している瀘沽湖地区の状況そのままではないかと感じた。



モソ族の若い女性と



モソ伝統の鍋庄舞

おわりに

今でも瀘沽湖で出会った「勤労でやさしい女性たち」のことをよく思い出す。彼女たちを見ていると、「母親と暮らしたい」という者は残り続けるだろうと実感した。民族間の交流はさらに増えるなかで、モソ人は今後も自文化を維持しながら、周囲と共存してゆくであろう。

お知らせ INFORMATION

第5回・第6回ワークショップ受講者募集

テーマ：インド社会と宗教～仏教の変遷とその役割を中心として～
 日時：2001年2月28日(水) 13:30～15:30
 場所：天神ビル11階10号会議室(福岡市中央区天神2丁目12・1)
 講師：カルバカム・サンカラナラン氏
 (国際日本文化研究センター客員教授)
 コメンテーター：中川 正法(なかがわ まさのり)氏
 (筑紫女学園大学文学部アジア文化学科助教授)
 募集定員：150名
 共催：福岡市

テーマ：多民族国家マレーシアの発展戦略：社会文化的側面から
 日時：2001年3月13日(火) 13:30～15:30
 場所：アクロス福岡7階大会議室(福岡市中央区天神1丁目1・1)
 講師：文平 強(ヴーン・ビン・キオン)氏
 (京都大学東南アジア研究センター客員教授)
 コメンテーター：中澤 政樹(なかざわ まさき)氏
 (九州産業大学国際文化学部地域文化学科助教授)
 募集定員：150名
 共催：福岡市

お申し込み方法/第5回・第6回ワークショップ共通

お申し込みは、はがき、FAX、電子メールにご希望のワークショップ名を明記の上、郵便番号、住所、氏名(ふりがな)、年齢、職業、電話番号を記入して当センターまで。電話でもお申し込みできます。(入場無料)

〒814-0001 福岡市早良区 百道浜2丁目326 財団法人アジア太平洋センター	第5回もしくは第6回ワークショップ受講希望 郵便番号 住所 氏名(ふりがな) 年齢 職業 電話番号
--	---

アジア太平洋センター (APC) 賛助会員募集中

当センターの事業・趣旨に賛同し、アジア太平洋地域の知的交流や国際理解を深めるためのAPCの活動を応援していただける賛助会員の方を募集しています。会員には個人、法人の2種類があります。

年会費(毎年度継続して納入いただきます)
 個人：1口 3,000円 法人：1口 30,000円

賛助会員の特典

センターが発行しているニュースレター「アゴラ」やニュースレポート「中国動向」・「韓国動向」、研究誌「APCアジア太平洋研究」等の刊行物をお送りいたします。

センター主催の講演会、ワークショップ等にご案内いたします。有料のものは受講料が割引になります。

企業内セミナーなどの講師についてご相談に応じます。

ほかにもいろいろな特典がありますので、この機会にぜひご入会ください。

今回新たにご入会いただいた会員の皆様をご紹介します。ご入会誠にありがとうございます。

個人会員
 石松 昭雄 瓜生マサエ 江崎 茂 川本 次男
 佐藤 健介 田中美奈子 田中 義彦 林 統一
 早船 正夫 保坂 守人 本村 汎

(五十音順・敬省略)

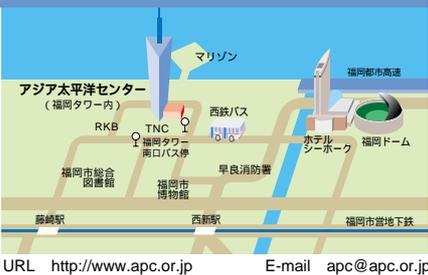
お申し込み・お問い合わせはこちらへご連絡下さい!
 〒814-0001 福岡市早良区百道浜二丁目3-26
 福岡タワーセンタービル内 財団法人アジア太平洋センター
 事業企画係 Tel: 092-852-1155 Fax: 092-845-3330
 【9:30～17:30 土曜、日曜、祝日は休みです】

編集後記

「アジアの世紀」と言われている21世紀の幕が開きました。アジア各国では、その21世紀のアジアの中核を担う子ども達の学校教育に熱心なようです。教育立国のシンガポールではもちろんのこと、今号の竹熊先生のコラムにもありますようにマレーシアでも以前からIT教育が盛んに行われています。日本でも、最近になって小中高校へのパソコン導入やIT教育の強化を推進しはじめ、2002年度の学習指導要領改定では中学校教育に「情報とコンピューター」の分野も加わります。また、小学校でも英語教育を実施すべきだという声も高まっており、今後はアジア地域の子どもの間でも「IT」と「英語」という共通の手段を通して、コミュニケーションや交流の幅がますます広がっていきそうですね。 K

〔お詫び・訂正〕
 アゴラ30号の2ページに掲載しておりました自主研究6Aプロジェクトの共同研究者の氏名が手島武雄先生となっていました。手島武雅先生の誤りでした。お詫びいたしますとともに、ご訂正をお願いいたします。

財団法人アジア太平洋センター
ニュースレター Agora Vol.9 No.31
 発行日/2001年1月31日
 編集・発行/財団法人アジア太平洋センター
 〒814-0001
 福岡市早良区百道浜2丁目3番26号
 福岡タワーセンタービル2階
 TEL092-852-1155 FAX092-845-3330
 編集協力(株)アルコス
 印刷/白木メディア(株)



[アゴラ]は再生紙を使用しています。 [Agora]とは古代ギリシャの集会所、広場を意味する言葉です。

